

生態循環型農業新技術を多数導入

——わが市の農業技術に大きな転機——

取材 沈湘偉 干光磊

昨日、中日生態循環型農業新技術普及活動がわが市で大々的に展開された。今回は導入された新技術は、4分野にわたる計20項目となった。その多くは、世界的にも先進的であり、その普及と活用により、わが市の農業技術水準は大幅にアップするとみられている。

今回導入される技術は、有機農業、作物栄養生理技術、養殖技術と生物防除技術の4分野にわたるものである。市科技局農村科技処長の王志強氏はその特徴を次のように説明した。南京林業大学教授・中国工程院アカデミー会員の張齊生先生が紹介した「バイオマスの高効率・無公害の資源化利用技術及び活用」を例に言えば、国内外ではバイオマスに関する利用技術は数多く存在しているが、実際に様々な条件や環境に制限されるため、成熟した、経済的かつ容易に利用可能なものは実に少ない。しかし、今回紹介されている技術は高効率で無公害、しかも資源化できる最新技術だという。

取材によると、鎮江市の農村部には、わらを気化炉に送入し、できた可燃ガスを発電や住民の日常生活に利用する地域がある。今回の導入された技術では、わらだけでなく、米ぬか、果皮、果樹枝等、いずれも粉砕すれば原料として利用できる。さらに、その過程で気液分離によってできた各種の木酢は、家畜飼養の消毒液、消臭剤或いは作物成長促進用の葉面肥料にもなる。高温反応後の炭は、燃料に利用するほか、新技術によって家禽、家畜の糞と混合して炭入り複合肥料を作ることにもできる。また、田んぼに還元すれば、土壌の通気性改善や地力アップにもつながる。

日本農業環境技術研究所の藤井義晴博士が紹介した「自然循環型農業における他感作用の応用について」も大変注目を集めている。いわゆる「他感作用」とは、植物が放出する化学物質が他の生物に阻害的あるいは促進的な何らかの作用を及ぼす現象のことをいう。

当市の農業技術専門家らの説明によると、今回日本側の専門家が紹介した技術の多くは実用性が非常に高いという。農民たちは、普段の施肥はほとんど長年の経験に基づいて、作物の成長時期によって窒素、リン酸、カリウムを投入しているので、正確な使用量はなかなか把握できていない。しかし、今回作物栄養生理専門家の渡辺和彦氏は論文「作物の栄養生理研究の最新動向」のなか

で、「迅速養分テスト法」を用いる土壌分析を紹介した。それを利用すれば、より科学的結果が得られるので、農民にとっては土壌状況に合わせて栽培することが可能になり、コスト削減と収益増大につながるのである。

（「京江晩報」2008年7月5日）